

『吾輩は猫である』無名

Junko Higasa 2015.9.23

一回読み切りで終わるつもりだった作品（第一章）は『吾輩は猫である。名前はまだない』で始まり、『無名の猫で終るつもりだ』で閉じられる。男全員が共有できる「吾輩」という性別を表す一人称でしか自己を表せない雑種の猫は、実績に基づく階級を証明する肩書もなければ、身分により守るべき血統もない。猫であるからして、人間社会の一員ではない。仮に人間であるとしても、名前がないのだから社会の一分子として認められていない。しかし男という実体として存在するのは、紛れもない事実である。この生活弱者の立場をもって、漱石はスターンの如く、書く者は自己であるが、書く事の責任は著者にはない、という無責任を持って、外部によって作り出される固有名のイメージと、作者である自己内部に起る名前の引力の影響を払拭して、強者育成社会に向かって猫に自由発言をさせた。その発言は漱石という固有の主観を、無名の猫という普遍のフィルターで濾過した客観的視点を持つ、自己の反戦意思表示と社会提言である。猫は無名であるが故に、作者自身の思いを自由に解放すると同時に、人間でない故に国賊の汚名を逃れる。そのオブラートに包まれた本音は、世間の共感を得て評判を呼んだ。

漱石は西洋文学手法のマニエリズムによって、巨人社会の引力に吸引されない主人公を持って、普遍的人間の権利に関する自己の主張を巧みに発表した。